

—京郊の歴史的風致—

(1) 舟運を支えた地域

この項では、豊臣秀吉により城下町が形成され、その後舟運により発展を遂げた流造でも知られる伏見とその周辺の地域についての歴史的風致を示していく。

ア 伏見とその周辺の歴史

(7) 豊臣秀吉、徳川幕府による城下町の建設

京都市の南東部に位置する伏見地域は、万葉集にも詠まれるなど、古い歴史を有する地域である。既に平安時代から淀川の舟運と陸路で京都と大阪を結ぶ物流の中継地としての役割を果たしてきた。

この伏見のまちが大きく変わったのが、豊臣秀吉による伏見城の築城と城下町の建設である。伏見の城下町の建設は、豊臣秀吉が伏見城を築いた文禄3年（1594）から始まる。城下町の建設に当たり、秀吉は伏見に水陸交通の機能を集中させるため、周辺の地形を大きく変える大土木工事に着手した。文禄3年、秀吉は直接巨椋池おぐらいけに流れ込んでいた宇治川を槇島堤によって分離北上させ、伏見城下に引き入れた。また、三栖たいこうづつみから淀に至るいわゆる太閤堤を築造し、宇治川を西流させて淀川へと直結させた。

文禄5年の大地震により伏見城も城下も壊滅したため、改めて城下町が再建され、城下は、東西4km南北6kmの広大な地域に及び、基盤目状に整然と区画された。「四つ辻の四つ当たり」と呼ばれている東本願寺伏見別院前の道路のほかは、城下町特有の遠見遮断や袋小路が見当たらず、またその区画のほとんどが全国六十余州の大名たちの屋敷で占められていた。町人地は街道沿いや濠川ほりかわ（外堀）の西側に配され、とくに大和街道沿いにあたる京町通りは往来する人々で賑わっていた。現在の伏見の市街地は、この城下町の都市構造が基盤となっている。

この伏見城が廃城になり、それにかわって徳川幕府により新たに淀城が築城され、城下町が建設された。淀は、宇治川・桂川・木津川の3川が合流する付近に位置し、早くから軍事上、交通上の要衝として知られたところで、10万石余を擁する淀藩の城下町として賑わった。しかし、淀城は、慶応4年（1868）の鳥羽・伏見の戦の際



写真2-109 淀城跡の石垣

に炎上し、天守台と本丸の西・南側の石垣、内堀の一部等が残るのみである。現在は、淀城跡公園として整備され、市民の憩いの場となっている。また公園の北

側は明治時代に水垂より移された与杼神社（拝殿：重要文化財）の境内になっており、淀城跡と相俟って歴史的な雰囲気を醸し出している。

(イ) 高瀬川の開削による港町としての発展

江戸時代に入ると、京都の豪商・角倉了以が、慶長19年（1614）に高瀬川を開削した。これより高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり、舟運による物流の拠点機能が高まり、港町として、そして水陸の交通の要衝にある宿場町としてさらに繁栄することとなった。この当時、淀川を伏見から大阪まで往来していたのが十石船や三十石船で、それらが舟運の中心的役割を果たしていた。

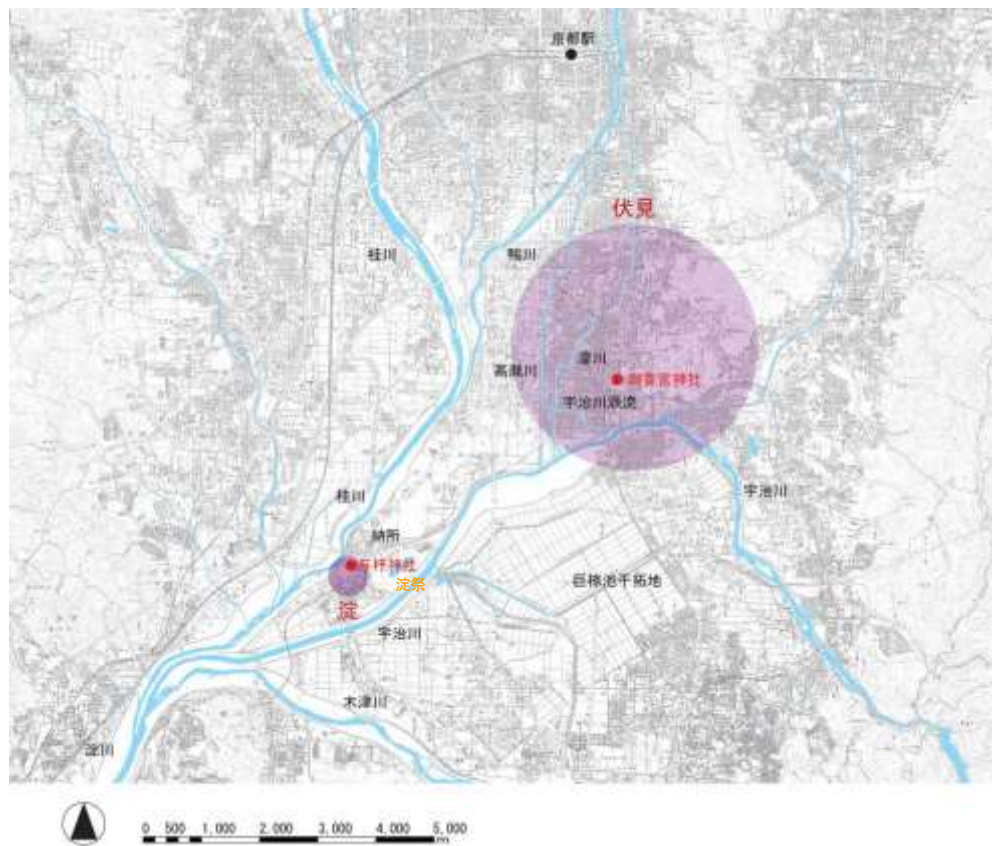


図2-64 伏見と淀

イ 伏見のまちと酒どころ

かつて伏見は「伏水」と表され、良質な地下水が豊富なところとして知られていた。現在も近郊の祭礼行事の中心社として広く信仰を集めている御香宮神社は、平安期、境内から病気に効く香水がわき出たため清和天皇からこの名を賜ったといわれている。文禄3年（1594）から始まる秀吉による城下町の建設以降、この良質で豊富な地下水、そして舟運などの物流機能、城下町・宿場町としての発展によ

る酒の需要の高まりなどを背景に、伏見の酒造は盛んになり、江戸初期から本格化した。天保12年（1841）に刊行された「泰平伏見御役鑑」には、明暦3年（1657）における酒造屋株の存在が記されている。

伏見の酒が飛躍的な大発展をとげたのは、明治以降である。酒の腐敗防止のため、当時はまだ珍しかったビン詰めの商品に力を入れたり、汽車を利用して東京への売り込みに努めたりするなど、数々のアイデアと努力が実を結び、全国に流通するきっかけをつくった。

伏見では今も京都を代表する銘酒が数多く造り続けられている。伏見区内の南浜、板橋、住吉を中心とする区域に多くの酒造会社が点在しており、大正時代に建造された月桂冠旧本社・黄桜酒造（清酒工房）・松本酒造などの歴史的建造物では、現在もお店舗や工房として営みが受け継がれている。冬季に伏見のまちなかを歩いているとどこからともなく新酒の香りが漂う。

また、現在、伏見にある多くの蔵元が伏見酒造組合に加盟し、酒造仲間の心意気を受け継ぎながら積極的に活動しており、約400年の歴史をもつ伏見の酒造の歴史などを紹介する記念館を中心に多くの酒蔵が並んでいる。

伏見の酒は、きめの細かいおだやかでソフトな風味を特徴としている。これは主として低温長期のもろみ発酵と、発酵末期に四段仕込みを活用することによって生まれ、洗練された京料理とともに発展してきた。

素材の風味を生かしながら、しっかりと味付けされた京料理に合う酒として、コクがあり、きめの細かいソフトな風味がはぐくまれてきた。

伏見の蔵元の杜氏たちは、越前・丹波・但馬・南部・広島等様々な地域からやって来る。こうした多流派による技の競争が今日の伏見の酒質を作り上げてきたともいえる。

この酒造が行われている伏見のまちは、秀吉の城下町の都市構造と、かつて水運を担っていた高瀬川や濠川などの水路網が骨格となっている。現在、かつての水運の賑わいを復元しようと、期間限定で十石船と三十石船が宇治川派流を運航しており、水路から酒蔵や歴史を感じさせる風情を楽しむことができる。

また、町家と酒どころ伏見のシンボルでもある大規模な酒蔵が好対照を見せて建ち並ぶ佇まいが特徴的なまちを形成している。



特に酒蔵は、大規模な建造物でありながら、妻面が見せる深みのある陰影、漆喰壁、焼板壁及び瓦屋根などが独自の風情を醸し出し、酒どころとして近代から今日まで生き続けている伏見の人々の気概をうかがわせている。これらの酒蔵は、鳥羽伏見の戦いで酒蔵のほとんどが被災したため、明治以降、地下水をより有効に活用するため最良の地下水が湧き出る現在の地に構えられたものである。



写真2-110 酒蔵の町並み



写真2-111 十石舟

ウ 伏見やその周辺の祭礼行事

御香宮神社は、伏見の産土神うぶすなかみとされる。その由緒は、式社内の御諸神社みもろであるとも、九州の香椎宮であるとも言われるが、貞観4年（862）に境内から香水が湧き出たことから、御香宮と称したとされる。

文禄年間（1592～1596）に豊臣秀吉が、伏見城の鬼門の守護として大亀谷おおかめだにに遷座したが、徳川家康が慶長10年（1605）にもとの場所に戻した。境内には、本殿、表門（重要文化財）など、桃山文化を象徴する建造物が点在している。

看聞日記では応永23年（1416）以降、9月1日に御香宮祭礼が行われていたという記事が散見される。現在は神幸祭もしくは伏見祭と呼ばれ、毎年10月上旬に数日にわたっておこなわれる伏見随一の祭である。

祭の初日と最終日の前日の2回、各町内から花傘が御香宮神社に集まる（花傘総参宮）。かつて、村ごとに競って趣向を凝らしたという花傘は、今も町内ごとに工夫をして作っている。また、最終日には、3基の神輿のほか、獅子、猿田彦命さるたひこのかみ、稚児行列、武者行列が、趣向をこらした大小の花傘が氏子各町から「アラウンヨイヨイ…」のかけ声で参加し、夜遅くまで賑わう。

また、現在の能楽堂は明治時代のものであるが、年1回御香宮神能が行われている。

このほか、淀や納所などの産土神として鎮座している与杼神社で毎年秋に行われる「淀祭」では、旧神社跡に向けて3基の神輿が担がれたのが始まりとされる神輿みこし渡御とぎよが行われる。

エ 舟運を支えた地域における歴史的風致

このように、伏見・淀においては、城下町の都市構造を骨格として、川という京都の自然を生かした水運、名水を活かした酒造などの伝統的な人々の活動や神社などで行われる祭礼行事が現在もなお受け継がれ、酒蔵など歴史的な建造物を中心とした町家群等が建ち並ぶ変化に富んだ歴史的町並みと一体となった風景が今もまさに伝統が息づいていることを感じる。

(2) 景勝地としての洛外

京都の三山の麓の地は風光明媚な景勝地として古来より多くの人々が訪れた。平安遷都以来これらの地には、自然豊かな風景を楽しむため、貴族の別荘や隠棲の居、門跡寺院などの寺社が営まれた。またその風景は和歌や物語などの文学や絵画などの中に描かれた。このような地は、次第に名所として意識されるようになり、室町時代には庶民がこれらの景勝地へ訪れるようになった。

江戸時代になると、絵で見て楽しむ「都名所図会」^{みやこめいしよずえ}などの発刊も手伝い、名所旧跡詣でが盛んになった。洛外と呼ばれたこれらの地域は、三山の麓の美しい自然の中に、寺社、庭園、史跡、あるいは和歌や物語などの文学の舞台のある場所として知られ、地方から多くの人々が京都を訪れた。そして、京都の人々は、京都の案内記や、京都へ来訪した人々の中で定着した京都を通してこれらの地を再認識し、来訪者を迎える営みを続けてきた。

この項では、嵯峨野を具体事例として、京都の洛外の景勝地に形成されている歴史的風致を示していく。

ア 具体事例：嵯峨野^{さがの}への景勝地詣で

嵯峨野は、古来より景勝の地として知られてきた。嵯峨という地名が現れるのは、平安京が営まれて間もなくのことで、平安京の原型とした唐の長安の近郊にある景勝地「嵯峨山」(峨眉山)から得たのが地名の由来と言われている。この地域は、船岡山や神楽岡^{かぐらおか}と並んで聖なる丘の一つとされた双ヶ丘^{あたごやま}、愛宕山や小倉山などの山々、豊かな清流を湛える大堰川^{おおい}、一陣の風にさやさやと音を立てる竹林など、美しい自然に恵まれた地域である。

平安時代の嵯峨野は、貴族たちの狩猟の場だけではなく、美しい自然を愛で、そして親しむ別業地(別荘地)でもあった。

西園寺公経^{さいおんじきんつね}の別業地を足利義満が譲り受け、その没後に開山された金閣寺^{ろくおんじ}(鹿苑寺)、大徳寺実能が別業とした地に創建された竜安寺、光孝天皇の発願によって建立され宇多天皇が居を営んだ仁和寺^{にんなじ}、花園法王が別荘を喜捨して寺院とし、その後文明年間に中興された臨済宗大本山の妙心寺、嵯峨天皇が営んだ嵯峨院が元

になった大覚寺，後嵯峨上皇が営んだ仙洞嵯峨御所に足利尊氏が創建した天龍寺など，嵯峨野をはじめとする洛西に点在する寺院の多くは，もとを辿ると皇族や貴族などの別業地を前身としている。

これらの寺社や庭園をはじめ，嵯峨野に広がる田園風景や農家，街道筋に立ち並ぶ民家などと美しい自然とが融合し，洛中とは一味違う洛外の伸びやかで美しい景色が織り成されてきた。

そして，この嵯峨野は，様々な和歌や物語，謡曲の舞台となった。例えば，「源氏物語」の「賢木」の巻では，六条御息所の娘の斎王の潔斎地として嵯峨野の野宮が描かれている。「ものはかなげなる小柴垣」「黒木の鳥居どもさすがに神々しう見え」と描かれた野宮神社は，黒文字の枝を竹に結んだ垣根，黒い樹皮をそのままに立てた黒木の鳥居のたたずまいを持ち，物語の中の野宮の遺風を今日に伝えている。また，明石女君が来京した際の住居が大堰川の川べりに設定されており，光源氏が「大覚寺の南」に造作した「嵯峨野の御堂」（現在の清涼寺の地にあった棲霞観がモデルとされている）にかこつけて明石女君に会いに行く様子が描かれている。かつての大堰川の船遊びを偲ぶものとして，昭和3年に創始された車折神社の「三船祭」では，川面に浮かべられた色とりどりの舟が平安の雅を思わせる。

江戸時代には，これらの舞台が「名所」として人々に意識されるようになった。そして，寺社への参詣とともに景勝地詣でが隆盛した。嵯峨野は今も清水寺周辺に次ぐ京都を代表する名所となっている。

寺社への参詣や景勝地詣でが盛んになるにつれ，それらの人々をもてなすための産業が盛んになった。江戸末期に書かれた「筆満可勢」では，大井川河畔に宿屋の存在が示されており，また18世紀頃に書かれた司馬江漢の旅行記では，田楽茶屋の存在が示されている。現在でも，地元の竹を使った伝統工芸品などの土産物屋や料亭，料理旅館などが，嵯峨野，嵐山地域に点在し，和を基調とするそれらの建物が美しい景色に溶け込んでいる。

このように，嵯峨野の人々は，京の皇族や貴族が別業地を営み，また文学などに表現される風光明媚な嵯峨野の風景を大切にし，この景勝地を訪れる人々をもてなす営みが今なお続けられている。

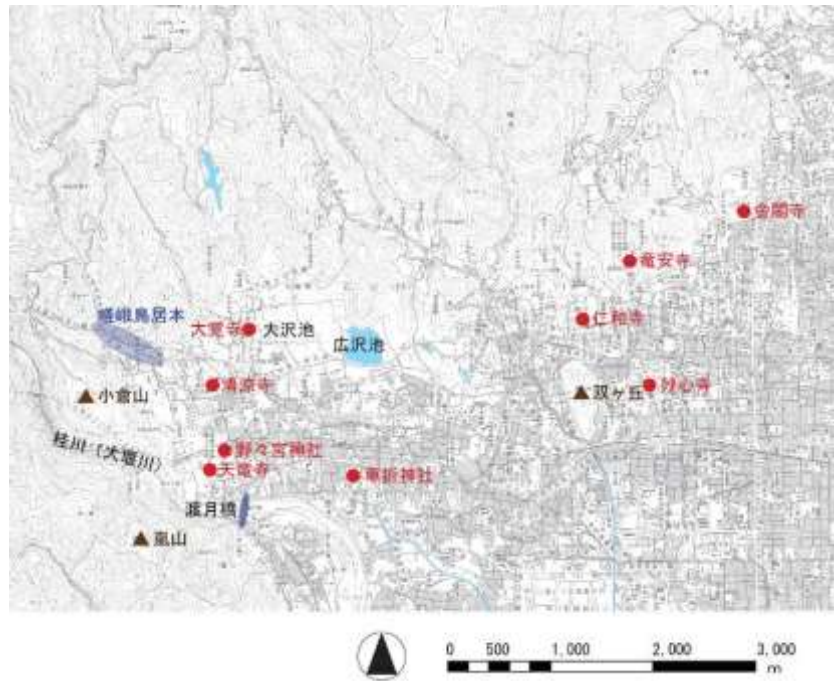


図2-66 嵯峨野の景勝地



写真2-112 西山から大沢の池, 広沢の池



写真2-113 嵯峨野の風景



写真2-114 大沢の池 大覚寺



写真2-115 大堰川 渡月橋



写真2-116 嵯峨野の土産物店

(3) 京街道と京の七口

京都では、1200年前に平安京が成立すると、すべての主要な道が平安京に通ず

ることになり、街道を通じて、京都で培われた文化が各地へ伝わった。

これらの街道の京都の出入口は、京の七口と呼ばれ、時代によって変わるが、現在も栗田口、荒神口、鞍馬口など地名として残り、人々の生活と強く結びついている。そして、これらの京都の出入口から各地に通ずる京都の街道には、鞍馬街道、若狭街道、伏見街道、山陰街道、愛宕街道、鳥羽街道などがありそれぞれに街道町や集落などが形成されている。

この項では、京都に通ずる主要な街道を例として、そこに形成されている歴史的風致を示していく。

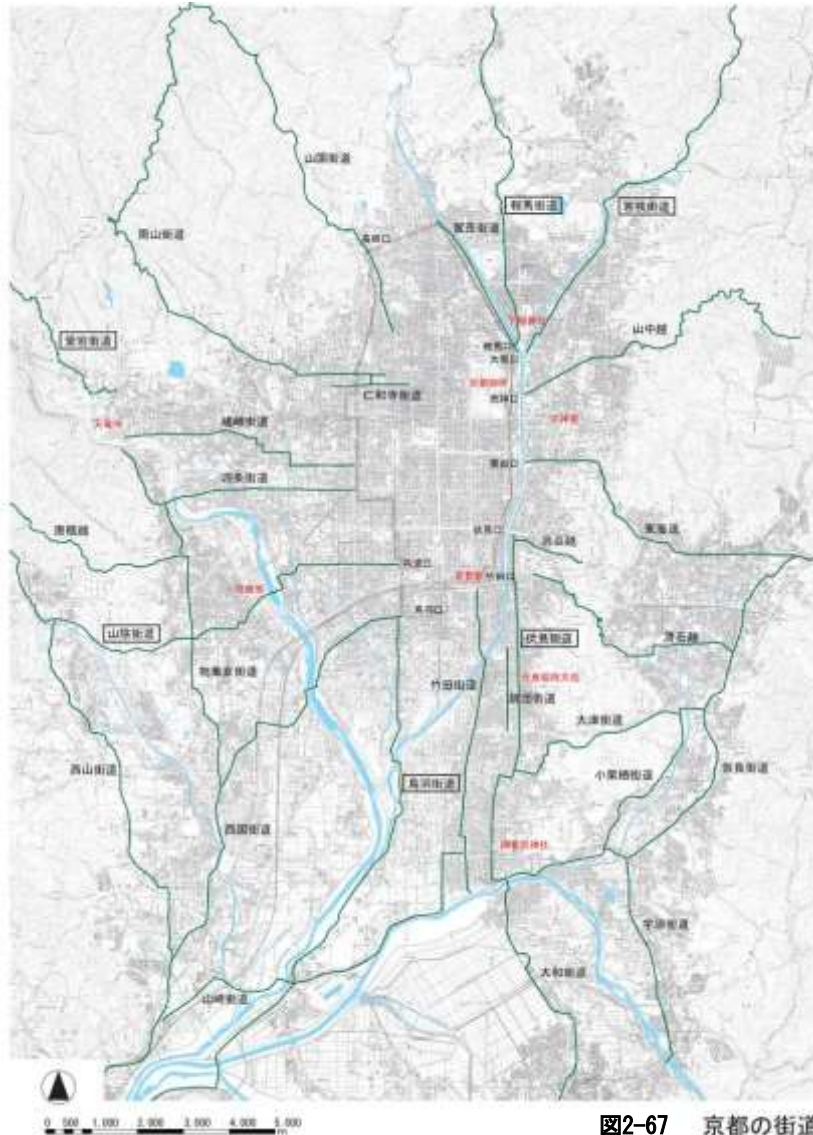


図2-67 京都の街道

ア 鞍馬街道

京都と丹波を結ぶ鞍馬街道は、物流の道として、また鞍馬寺・貴船神社への参詣道として平安期から利用された。この街道には、貴船へ向かう貴船道との分岐があり、さらに北へ進むと鞍馬寺の門前町へ至る。

(7) 鞍馬

鞍馬街道の要衝地である鞍馬は、鞍馬川に沿った山間の谷口集落である。平安遷都後、京都北方守護の寺院である鞍馬寺が創建されてからは、門前町として発展し、近世は、丹波からの炭の集荷、中継地としても栄えた。

a 寺社と門前町

鞍馬寺は、8世紀に創建されたと伝えられている。牛若丸（源義経）が修行をした地として知られ、木造毘沙門天立像などの、国宝や重要文化財に指定された仏像や文書等が残されている。鞍馬寺の境内にある由岐神社の歴史も古く、天慶3年（940）にこの地に鎮座したと伝えられ、豊臣秀頼により再建された拝殿は、桃山文化の建築として重要文化財に指定されている。

鞍馬の町並みを街道から見ると、周囲の山々が屋根越しに見えて、山が町並みの背景となり、合間に鞍馬川や川の向こうに広がる畑地がみえかくれするなど、自然環境と一体化した町並みを形成していること



写真2-117 鞍馬の町並みと自然

は、江戸初期に成立した「^{ようしゅうふし}雍州府志」にも記載が見られる、鞍馬の特産品の「木の芽煮」などが販売され、独特の香りが漂い、鞍馬寺の門前町としての風情をかもし出している。

また街道沿いには、由岐神社のお旅所がある。祭礼のときに^{みこし}神輿が渡御するところであるが、日常は小広場として子供の遊び場にも使われており、住民にとってなじみ深いところである。また、これら以外にも祠や地蔵堂が、町並み



図2-68 鞍馬街道

が分かる。その町並みを構成する民家は、町家風民家が中心である。街道の両側に建ち並び、連続性のある町並みを生み出しており、中でも瀧澤家住宅は、伝統的様式をよく残しており、国の重要文化財に指定されている。

街道に軒を連ねる歴史的な民家で

にとけこむようにしていくつか点在している。

鞍馬川は、生活用水や非常の際の防火用水などに利用され、川面におりる石段、川沿いに開かれた畑地や川原沿いのみち、せせらぎの音までもが複合しあい、優れた自然景観を生み出している。

鞍馬のまちの背景をなす鞍馬山は、全山木々のおい繁る緑深い山であり、鞍馬寺の神聖な寺領でもあり、また住民が山林業を営む場ともなっている。

b 鞍馬の祭

こうした長い歴史を有し、門前町として発展してきた鞍馬の町並みのなかで、地域の人々の手によって、伝統的な祭りが受け継がれている。

時代祭と同じ10月22日の夜に行われる「鞍馬の火祭」(市登録文化財(無形民俗文化財))は、「京都の祭礼」の項でも示している通り、由岐神社の祭礼で、鞍馬のまちの各所に焚かれたかがり火の中を氏子の若者たちが大きな松明を担いで練り歩く勇壮な祭で、京都の三大奇祭の一つと言われている。

また、長さ4mもの青竹を大蛇に見立て切り落とす速さでその年の豊凶が占われる鞍馬寺の竹伐り会(市登録無形民俗文化財)(「^{みやこめいしよずえ}都名所図会」で紹介されている)や初寅など、鞍馬の祭は毎年多くの人々で賑わい、街道筋の歴史的な町並みと一体となって、独特の風情を醸し出している。

(イ) 貴船

鞍馬街道から^{せりょうとうげ}芹生峠へ至る道へ入ると、そこは水の神を祀る貴船神社で知られる貴船の地である。

貴船神社は5世紀頃の創建と伝えられる古社で、現社殿は文久年間(1861～1864)の造営である。古くから水神として信仰され、今でも農林漁業者や醸造業者らの信仰が厚い。

6月には貴船神社の例祭である貴船祭が行われ、^{みこし}神輿が貴船町内を練る。その日の午後には、奥宮にある船形石で、地元の子供たちが忌み串を手で「おせんどんどん」と唱えながら船形石をめぐる千度詣が行われ、貴船の自然と一体となって、歴史的な風情を醸し出している。貴船祭は古くは4月と11月に行われていた様で、延宝4年(1676)に成立した「^{ひなみきじ}日次紀事」の中にも



写真2-118 貴船の納涼床

記されている。

また貴船は、京の避暑地として栄えた地域であり、貴船神社付近の参道には料理料亭が軒を並べ、貴船川の川床は、夏の納涼の風物詩となっている。

貴船の川床の歴史は大正時代頃、京都と丹波を行き来する人や貴船神社への参拝客たちを、川に床机しょうぎを置いてお茶や食べ物などを出してもてなしたことが始まりといわれている。戦後になって今のような川床になり、料理旅館が増え始めた。

貴船川の川面いっばいに低く床を張る。足が浸かるほど水面に近いので、清流の冷氣と近くに聞こえる瀧の音を楽しみながら料理を味わうことができる。

川床は、5月から9月末まで設けられ、真夏は市内より気温が5℃以上低い。ここで楽しむ食事は、川の幸と山の幸を中心にした料理が中心であり、さわやかな川のせせらぎが情緒を醸し出し、訪れる人々は市中を離れ、納涼の風情を楽しんでいる。

(イ) 鞍馬街道の歴史的風致

このように鞍馬街道では、街道沿いなどに形成される町において、門前町としての営みや、避暑地としての営み、またその町の中心となる寺社で行われる祭礼などの営みが、寺社等の歴史的建造物や町並み、そして背後に広がる山々や川などの自然と一体となって風情のある環境を醸し出し、京と密接に関わってきた街道の門前町としての往時の姿を伝統ある祭礼などを通して感じることができる。

イ 若狭街道

若狭街道は、京都の北部山間を経て若狭に抜ける道である。平安京以来の古道で、若狭で獲れた魚介類を京都に運ぶための重要な街道であったことから魚街道、鯖街道と呼ばれ、往来も多かった。また、この街道沿いの大原などは自然風景豊かな山里として、貴人の隠棲の地としても知られている。

(7) 大原

a 貴人の隠棲地

大原は、静かな山里であり四季の移ろい豊かな自然環境を持ち、かつては貴人の別荘や隠棲地ともなっていた。街道から西に入り進んでいくと姿を現す寂光院



は、源平合戦の後、建礼門院徳子がその子安徳天皇の菩提を弔い余生を送った地として知られる。また、街道の東に位置する三千院は、^{ぎょざんしょうみょう}魚山 声 明 を伝えることで知られる。伝教大師最澄が比叡山の東塔南谷に開いた草庵に始まり、12世紀より宮門跡となり、梶井門跡とも称した。その時、天台宗の声明の道場であった大原魚山（来迎院、勝林院、往生極楽院など）を管理することになり、大原に政所を設けたのが現在の三千院の前身である。声明とは、お経に節をつけて詠むもので、宗教音楽であるともいわれる。往生極楽院阿弥陀堂（重要文化財）はこけら葺の仏堂で、久安4年（1148）の造営と見られている。この界限は、現在は農業と観光を中心とした地区であるが、隠棲の里として特有の雰囲気醸し出す四季折々の眺めは市中とは違った趣がある。

この三千院では、2月の初午大根炊きでは地元大原で栽培された大根が使われ、多くの参拝者で賑わいをみせ、また、12月には大原の地域で托鉢寒行が行われ、師走を感じさせるなど、地域と結びついた様々な年中行事が行われる。

b 山里としての営み

高野川の川上に開けた大原の里は、かつて貴人が好んで隠棲した地であったことから分かるように、四季の移ろい豊かな自然風景を形成している。また、伝統的な様式の農家建築などが今もなお残り、里山の風情を一層引き立てている。この農家建築は北山における一般的なものであり、中規模の農家建築が建てられるのは近世半ば以降と考えられている。

夏には山に囲まれた青い稲田の中に赤紫の紫蘇畑が入り混じって織りなす景色が美しい。この赤紫蘇は京漬物のしば漬けの材料にするもので、これ程たくさんに作る紫蘇畑は珍しい。

このしば漬けは、古くからの大原の特産で、その昔、^{じゃっこういん}寂光院に住まわれた建礼門院に土地の人が献上したところ喜ばれて、しば漬けの名を賜ったのがはじまりだという。その歴史は古いようだが、元は自家用として漬けられていたようで、後に特産となり、明治後期に発行された「京都府愛宕郡村誌」には、大原村の名産として紹介されている。

大原でこの赤紫蘇を伝統的に作るのは気候条件が適しているからである。一般に、紫蘇は夏の始めには赤紫蘇の美しい色をしているが、梅雨が明けて土用に入り、気温が30度を超すようになると色が褪せてくる。ところが大原では夏でもそれ程気温が上がらないことから、夏の間、美しい色を保ち続ける。

また、紫蘇の葉は、しなびやすいものであるため、地元で作る方がよいということも産地が大原から移動しない理由である。



写真2-119 大原の町並み



写真2-120 しそ畑

街道から江文峠への道の傍らに、大原八ヶ町の総氏神である江文神社がある。創建は不明であるが、井原西鶴の作品に当社の習俗が描かれており、また江戸時代中期ごろに成立した「山州名跡誌」にその名があがっており、例祭や神輿の存在も示されている。現在でも毎年5月に江文祭が行われ、神輿が担がれる。また、ここでは、毎年9月、15、6歳の青年によって踊る大原八朔踊（市登録無形民俗文化財）が行われる。江戸時代中期に都を中心に流行した踊口説で、夜7時頃、人びとは町名を書いた高張提灯^{たかはりちょうちん}を掲げ、出発の音頭を歌いながら江文神社へと向かう。江文神社の石段下に、それぞれの町の提灯を掲げて集結し、一同が伊勢音頭を歌いながら、石段を上がる。境内へは「寄せ歌」であるションガイナを歌いながら入場する。続いて各町からの音頭取りが四方に斎竹^{いみだけ}を立て、注連縄^{しめなわ}を張った屋台に上り、輪になって道念踊りを踊る。

また、上野町の村堂である観音堂では、市の登録無形民俗文化財である「おこない・お弓」が行われる。観音堂の創立及び「おこない・お弓」の起源は定かではないが、祭礼の母体となっている座への加入については、近世中期の資料に記載が見られる。さらに、5月には、大原観光保勝会によって大原女まつり^{おはらめ}が行われる。大原女とは、大原の里に住み、薪などを頭に載せて京に売りに出ていた女性である。30年ほど前から始められた大原女まつりは、中世から現代までの大原女装束をまとった大原女が、勝林院から寂光院までをパレードする時代行列で、大原女の暮らしに息づく伝統衣装を今に伝える風俗保存活動である。

このように、大原では寺社等の祭礼のほか、紫蘇の栽培など歴史に根ざした営みがなされており、寺社や農家建築とともに里山の風情を醸し出している。

(イ) 八瀬^{やせ}

街道筋を大原から京都方面に向かうと、八瀬の集落に入る。八瀬は、比叡山のふもとに位置する山間の集落で、春の桜、秋の紅葉が有名で、風光明媚な名所である。早くは比叡山延暦寺山門のため、のちには宮中の御大葬^{ごたいそう}のときの駕輿^{かよちよう}丁を

奉仕する村であり、その人々は今も八瀬童子の名で呼ばれている。

八瀬赦免地踊^{やせしやめんちおどり}（市登録無形民俗文化財）は、毎年10月、八瀬天満宮の摂社である秋元神社で行われる祭である。別名燈籠踊りとも呼ばれ、もとは、室町時代初期に始まった踊りで、江戸中期に祠を建て、踊りを奉納するようになったと伝えられており、明治後期に発行された「京都府愛宕郡村誌」にその記録がある。祭に使われる切子燈籠は、動物などの図柄を透かし彫りにして作られたもので、現在4つの花宿から各2基、合わせて8基出される。当日はこの切子燈籠を頭に載せた女装の男性らが行列を組み秋元神社に向かう。踊りと踊りの間に俄^{にわか}狂言^{きやうげん}をはさむ点や、切子燈籠に室町時代の風流踊りの面影を残している。



写真2-121 八瀬の町並み

(ウ) 若狭街道の歴史的風致

このように若狭街道では、街道に見られる集落などにおいて祭礼行事や伝統的な農業などが行われており、これらが寺社等の歴史的な建造物や農家などの建造物群、川や山などの自然風景が一体となって、穏やかな街道風景を形成している。

そして、そこを訪れる人々に、京と密接に関わってきた街道の門前町としての往時の姿を地元につながる風俗や祭礼などを通して、感じさせている。

ウ 伏見街道

伏見街道は、東山区五条を南下して、伏見に通じる街道である。豊臣秀吉が伏見城を築城した文禄年間（1592～1595）頃、京と伏見を直結する道として開かれたといわれている。沿道には東福寺や伏見稲荷大社、藤森神社など、著名な社寺や景勝地が多く、参詣の道として江戸時代から旅人の往来が絶えなかった。

中でもその代表格なのが、伏見稲荷大社である。伏見稲荷大社は、渡来系の秦氏にゆかりの深い神社で、和銅年間（708～715）に創建された。この伏見稲荷大社は、全国各地に祀られている稲荷神社の総本社であり、毎年初詣には、全国から沢山の人が参拝する。本殿（重要文化財）、拝殿、権殿のほか摂末社^{せつまつしや}も多い。山中^{しんせき}の神蹟を巡拝するお山巡りの参道の数千本の鳥居は偉観である。

稲荷祭は、平安朝からの伝統で、同社最大の祭典である。5基の神輿が、南区西九条のお旅所に渡御し、還幸祭に京都駅周辺から松原通まで広がる氏子区域を巡幸して帰社する。この神輿は全国でも優美華麗なものとして知られる。江戸時代初期

に書かれた「^{かくめいき}隔莫記」の中では、稲荷祭が華美であるという記載がある。

伏見稲荷大社前の参道は古くから伏見稲荷大社への参詣人のための土産物屋や料理屋などが軒を連ねて門前町を形成していた。寛政11年(1799)発行の「^{みやこ}都^{りんせんみょうしやうずえ}林泉名勝図会」には、^{はつまつ}初午のときの門前が描かれ、茶店等の様子やにぎわいの様子が描かれている。現在でも、神具類の店や伏見人形の店を始め、煙とともに醤油タレの焦げた香りが参道に漂う雀の焼き鳥、狐煎餅など、門前町として発展した伝統的な産業が受け継がれている。

伏见人形は、色をつけた素焼きの人形で、16世紀頃から売られており、伏見稲荷大社参詣の土産物として全国に有名になった。安永9年(1780)に発行された「^{みやこめいしやうずえ}都名所図会」では、門前の店で伏见人形を販売している様子が描かれている。伏见人形は、土人形の起源とされ、全国各地でも模倣されて同様の人形が縁起物として作られ、人気を博している。



写真2-122 伏見稲荷 参道

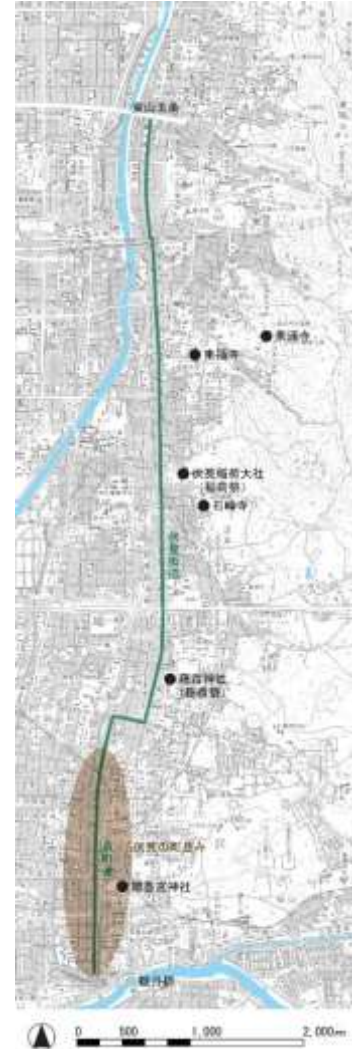


図2-70 伏見街道

藤森神社(重要文化財・市指定有形文化財)は、平安期以前、神功皇后が軍旗や武具をこの地に埋め神まつりしたのが始まりと伝えられ、菖蒲の節句発祥の神社としても知られている。5月の藤森祭では、朝から神輿3基が氏子内を巡行し、武者行列が練る。端午の節句に武者人形を飾る風習はこの行事に由来する。この日、境内では^{かけうま}駄馬神事(市登録無形民俗文化財)があり、馬上妙技が披露される。

東福寺は、臨済宗東福寺派の本山である。三門(国宝)をはじめ、浴室、^{とうす}東司禅堂(選仏場)、鐘楼(いずれも重要文化財)など貴重な建築が残る。^{りやうぎんあん}龍吟庵方丈

(国宝)は現存最古の方丈建築であり、方丈の周囲に枯山水の庭園をめぐらせる。境内の通天橋は、紅葉の名所であり、寛政11年に発行された「都林泉名勝図会」にもその様子が描かれている。

伏見街道には他にも、泉涌寺や石峰寺などの寺社や名所があり、街道はそれらの名所を繋ぐ形となっている。それぞれの寺社において様々な祭礼などが行われており、その街道沿い付近では、みやげ物の販売などの営みが行われており、街道沿いの寺社などの歴史的建造物や町並みと一体となって、歴史的な街道筋の風情を形成し、行き交う人々に、京と伏見を繋ぎ多くの人々で賑わっていた往時の街道の活気を今もなお感じさせている。

エ 山陰街道

山陰街道は、京と山陰地方を結ぶ街道で、7世紀の駅制による行政区画「山陰道」に由来し、その主要道が平安京に接続されたものが原型となっており、古くから物流などを支える重要な陸路である。また、江戸時代に入ると山陰地方の諸大名の参勤交替の行き来が見られた。



図2-71 山陰街道

^{かたぎはら} 極原は、桂川西岸の山陰街道に沿う集落で、かつては山陰街道の宿場町であった。本陣が残り、今もなお街道沿いの家々が当時の面影を残している。建築形式としては町家に近いもので、近世中期くらいからこのような形式の農家住宅ができてきたと考えられる。

極原の家々は街道よりも2～3m程奥まったところに建てられており、天井の低い2階を持つむしこ造で、大屋根の軒の出を深くして1階建のような外観となっている。街道と建物の空間は、物置、旅行者の休息場所として利用され、街道には障害物を置か



写真2-123 極原の町並み

ないようにされ、幹線街道として支障のない開放空間にされていたと考えられ、まちなかの道とは異なる空間である。その中で、玉村家住宅（市指定有形文化財）は、市内で唯一残る本陣遺構であり、また檜原宿の近世町家として評価される。

三ノ宮神社は、発祥は不明であるが、おそらく古代からあると推測される檜原地区の総鎮守で、明治時代に編纂された「京都府地誌」にも記載が見られる。境内には、地名の檜の古木があり、檜原の名称の由来とも言われている。5月の神幸祭は江戸中期には行われていた祭りで檜原祭と呼ばれ、延宝4年（1676）に成立した「日次紀事」の中でも記されている。祭の日には神輿が担がれる。他にも、1月の元始祭をはじめ、様々な行事が行われている。神社の前には国指定史跡の檜原廃寺跡があり、現在は子どもたちやお年よりの憩いの場として親しまれている。

このように、山陰街道では、街道町において行われる祭礼などが寺社などの歴史的な建造物や宿場の町並みと一体となって、趣きのある風情を形成し、今もなお、多くの旅人や商人が通ったであろう、街道筋の活気を感じさせている。

オ あたご 愛宕街道

愛宕街道は清涼寺の門前から西へ鳥居本を経て清滝・愛宕山へ通じる道であり、愛宕山山頂付近に鎮座する愛宕神社への参詣路である。江戸時代の書物には、京都から御室・清涼寺・清滝の順路で愛宕への道が描かれており、愛宕山への参詣道として、古くから多くの人々に利用されてきたことが分かる。



(7) 愛宕山と愛宕詣で

西山の中核となる愛宕山は、火伏せの神を祭る神山として畏敬され、この地を代表する山として古くから月まいるの場所として人々に親しまれてきた。

愛宕信仰は、愛宕山に鎮座する愛宕神社の愛宕神に対する信仰で、元来防火神として崇められ、現在も同社の「火廻要慎」の護符を竈の上に祀る風俗があるが、室町後期には愛宕大権現と称し、軍神ともなった。

京都の市中には各所に愛宕燈籠があって、遥か西北の愛宕山権現を崇拝するとともに、家々の台所にはかならず「火廻要慎」の愛宕の祈祷札が貼られていた。「伊勢には七度、熊野へ三度、愛宕山さんへは月詣り」とも言われ、山頂の愛宕神社に火伏せを願って京都だけでなく全国から参詣者が訪れる。

図2-72 愛宕街道

ことに7月31日夜から8月1日午前明け方にかけて行われる通夜祭には、参詣者が多く、一の鳥居のある嵯峨の鳥居本から、山頂まで、人の列が続く。この日のお参りは千日詣と呼ばれ、延宝4年（1676）に成立した「日次紀事」^{ひなみきじ}の中でも記されている。一日で千日の参詣に匹敵すると言われており、参詣者は火災除けの護符と^{しきみ}櫛の枝をうけ、これを家に持ち帰って神棚やおくどさんに祀る。

(イ) 嵯峨鳥居本^{さがとりいもと}

愛宕街道沿いに位置する嵯峨鳥居本は、室町末期頃、農林業や漁業を主体とした集落として開かれた。その後、江戸時代中期になると、愛宕詣の門前町としての性格も加わり、江戸時代末期から明治・大正にかけて、愛宕街道沿いには、農家、町家のほかに茶店なども建ち並ぶようになった。

地区の中ほどにある^{あだしのねんぶつじ}化野念仏寺を境として上地区と下地区に分けると、愛宕神社の一の鳥居に近い上地区は主としてかや葺の農家風、下地区は町家風の建物が周囲の美しい自然を背景に建ち並び、すぐれた歴史的環境を形成している。

この地区では、毎年8月に町内の地蔵盆と化野念仏寺の千灯供養が行われる。この千灯供養は、明治38年（1905）に始まり、当初は24日の地蔵盆に行ったが、近年は8月23日、24日の2日間行われ、京都の夏の風物詩となっている。また、これらに加えて、化野念仏寺付近で愛宕古道街道灯しが同じ日に行われる。愛宕神社一の鳥居から祇王寺までの街道筋に、およそ500を数える提灯が灯され幻想的な世界が演出される。



写真2-124 嵯峨鳥居本の町並み

(ウ) 愛宕街道に見る歴史的風致

このように、愛宕街道においては、通夜祭をはじめとする愛宕詣での営みや、その街道沿いにおいて行われる様々な祭礼が、寺社等の歴史的建造物や街道沿いの町並み、また信仰の山の風景と一体となって、厳かでありながらも人々の信仰とともに親しまれてきた参詣道としての街道の風情を、今もなお感じることができる。

カ 鳥羽街道

鳥羽街道は、淀から始まり、鴨川、西高瀬川の東に沿って鳥羽離宮跡のそばにある小枝橋を北上し、平安京の表玄関であったかつての羅城門まで続く道である。平安京建設と並行して作られた「鳥羽作り道」が鳥羽街道として受け継がれた。そして、平安京が建設された時、都の南方に鎮まり国の守護とされたのが、城南宮である。現在では、方除け大祭や曲水の宴などの年中行事が行われる。

鳥羽街道は陸路であるが、納所や横大路あたりで西国からの水路と結ばれていことから、このあたりは運送業者や宿屋が軒を並べ大いに賑わいをみせていた。また、この街道沿いには上鳥羽村や下鳥羽村という集落なども形成され、現在でもこれらの界限には歴史的建造物である農家や町家などが残っており、当時の面影を残している。これらの農家は町続きの街道沿いの農家住宅であり、建築形式としては町家に近いもので、近世中期くらいからこのような形式の農家住宅が形成されてきたと考えられる。



図2-73 鳥羽街道

街道の両側の民家は、少し高い石段の上に建てられている。上鳥羽から下鳥羽にかける、鴨川、桂川、西高瀬川の合流地点で、大雨となると川が溢れたからである。また、古くは京の伝統野菜である九条葱や壬^{みぶな}生菜などの野菜が多く採れたが、それは水つきによって土地が肥えていたためだと言われている。

また、平安京の南部に当たる地域は、水運業の発展や豊かな質の高い伏流水に恵まれていたこともあり、かつての下鳥羽村の集落が形成されていた地の街道沿いでは、創業300年余りの最も古い歴史を持つ蔵元の一つである増田徳兵衛商店などが、酒蔵や主屋の軒を並べている。ここでは、現在でも酒造が行われており、軒下に吊るされた杉玉が酒造りの家としての風情を醸し出している。

また、ここは、かつては京から大阪や西国の地へ赴く「お公卿さん」達の中宿もつとめた由緒ある旧家でもある。

このように、鳥羽街道では、街道沿いの民家において古くから行われ、今なお続けられる営みが、歴史的な町並みと一体となって、行き交う人々に、趣きある往時の街道の姿を今に感じさせている。



写真2-125 鳥羽街道と増田徳兵衛商店

キ 京街道と京の七口に見る歴史的風致

このように、京都における街道沿いの地域は、寺社などの歴史的建造物を中心に、祭礼行事をはじめとして、地域特有の伝統的な人々の活動が現在まで受け継がれ、町並みや、山、川といった自然環境と一体となって、地域特有の歴史的風情を醸し出している。

それぞれの街道は京から全国に通じる道であったことから、これらの地域における人々の営みはこれまでに述べてきたように京の文化や京の人々の生活とも繋がりがあがり、そこで営まれる人々の営みは京とともに歩んできた往時の姿を今に伝えている。

(3) 山や野にみる歴史的風致

三方を山々に囲まれている京都は、これらの山々やその裾野、そして平野部などにおける営みと関わりながら、発展を遂げてきた。

この項では、京都の山や野で営まれる生業を具体事例として、これらの山や野における歴史的風致を示していく。



ア 京都の三方の山々

写真2-126 山の風景

京都は三方の山々に川筋のある特長的な風土を有しており、このような風土が生み出す盆地景は、先人達が原風景として捉えてきた歴史的風致の基盤とも言うべきものである。また、この三山は、古くから信仰の山でもあり、自然を大切にする精神を培ってきた。

北部の山地は北山と呼ばれ、市域の最高峰である皆子山、峰床山、三国岳といった900m台の頂とその前面に標高400から600mの山々が連なっている。

東部の東山は、比良山系の南に続く比叡山を最高峰として始まり、稲荷山で終わる「東山三十六峰」が横たわるが、大文字山から音羽山・醍醐山へ続く尾根も東山山地を形づくっている。

西部の西山は、愛宕山から標高400から600mの山並みが保津川を挟んでポンポン山に続いている。

また、中山間地域は、山林、農地、民家群がセットになった美しい農山村集落の風景がみられるのも京都の特長である。



図2-74 京都の山

イ 具体事例

(7) 生業の野：京野菜

京都は海から遠く、海産物の運搬は難しい。このため、当時、世界でも有数の大都市であった平安京では、食生活を保つために野菜づくりが重要となり、洛外の地が野菜の生産地として開拓されてきた。また京都には、朝廷や寺院への献上

品として、全国各地から優れた野菜の種や生産技術が集まり、品種改良も行われてきた。さらに、精進料理の発達なども手伝い、全国から集まったそれらの野菜が京都で育成され、根付いた。

それに加え京都には、四季の移り変わりが明瞭であること、昼夜の温度差が大きいこと、地下水が豊富で豊かな土壌であったことなどの好条件がそろっており、このような環境が今日の京野菜を育てていった。昭和62年（1987）に京都府が34種を「京の伝統野菜」として選定したのをはじめに、平成21年現在では、40種にまでその数を増やしている。

昨今、いつでも、どこでも画一化された野菜が出回っており、野菜の季節感がなくなっている中、京野菜はその季節でしか味わえない昔タイプの野菜と言え、季節なくして京野菜を語ることは不可能である。春は、朝掘りの京たけのこや花菜。夏には、賀茂なす、鹿ヶ谷かぼちゃなどの果菜類。秋には丹波松茸。冬には九条ねぎ、京せり、千枚漬の原料となる聖護院かぶなど、その季節限定野菜が登場する。また、京料理や京漬物においても季節の野菜で内容が変わり、旬が味わえる。京野菜は、京都の食文化を支え、京野菜を食することで、季節を愛で感じることができ、京都の人々にとって欠かせない存在である。

京野菜の中の1つで、九条ねぎがある。九条ねぎの栽培の歴史は古く、1200年以上前に京都に導入され、その後、現在の京都市南区九条付近で品質のよいねぎが栽培されたことから、九条ねぎの名がついたとされている。承和5年（838）の「続日本後紀」などに九条ねぎと想定できる記録があるほか、近世になると江戸初期に成立した「ようしゅうふし雍州府志」に東寺の付近よりやや東南部にあたる東・西九条付近のねぎの記載がある。九条ねぎの伝統的栽培は、大変手間暇のかかる仕事で、秋に種を蒔き、3月頃まで苗床で育て、仮植えをし、7月下旬頃から1ヶ月ほど掘り上げて稲を干すように、約1ヶ月間天日で乾燥させる。収穫までには1年以上の月日がかかる。現在でも鳥羽街道周辺などで作られており、街道沿いには町家や農家が建ち並び風情ある歴史的風致を形成しているほか、九条周辺などでも作られている。

春の京野菜を代表する京たけのこは、江戸時代に道元禅師が中国から持ち帰り長岡京市奥海印寺に植えたと言えられており、明治時代に記された「京都府園芸要鑑」によると、現在栽培が盛んな西山地区には、寛政年間（1789～1800）に導入されたとされている。この地域では、高度な栽培技術と1年を通じての徹底した竹林管理がされている。秋から初冬にかけては竹藪に藁を敷き、肥料を施しては客土をかぶせてゆく。手間に手間を掛けた土はやわらかく、足が埋もれてしまうほどである。たけのこを掘る道具は、つるはしの刀の部分さらに長くしたような独特のもので、たけのこが土にまだ顔を見せない状態で掘り当てる。この地域は、山並みを背景にしたすそ野と田園が広がる集落で形成されており、

伝統的な様式を残す農家をはじめとする町並みが形成されている。

夏の京野菜を代表する賀茂なすは、洛北の上賀茂周辺で作られている。起源は明らかではないが、江戸初期に成立した「雍州府志」の「雑菜部」の「なす」の項にある丸くて大きいなすが、賀茂なすと考えられている。4月上旬に植えつけ、7月上旬から8月下旬に収穫される。

また、この地域では賀茂なすや水稻の後に、秋の終わりごろ収穫されるすぐき菜の生産も行われている。漬物のすぐきは、しば漬、千枚漬と並んで京都の三大漬物の1つと言われている。起源は定かではないが、江戸時代初期の「日次紀事」には記載があり約300年前には既に漬物として評価を得ていたことが分かる。もとは社家のみで栽培されていたもので、現在でも地域的に限られた状況で栽培され、栽培についての文献は無く地元住民の口伝にのみ伝えられている。収穫されたすぐき菜は漬物に加工される。根の部分の皮を剥き、塩で予備漬け、本漬けた後にむろに入れられ醗酵させる「むろ作業」を行う。これらの作業の加減などは長年の経験による秘伝となっており、すぐき菜の生産地が限定されている理由の一つとなっている。この地域は、上賀茂神社に使える神官の住居（社家^{しゃけ}）と農家が混在し、発展した地域で、今も落ち着いたこれらの歴史的建造物群が雰囲気^{ふんぎ}を漂わせている。



図2-75 すぐき菜の代表的な生産地（上賀茂）

秋冬の京野菜を代表する聖護院だいこん・かぶは、10・11月から収穫時期である。聖護院だいこんは、文政年間（1818～1830）に現在の左京区聖護院に住む農家が黒谷の金戒光明寺に奉納されただいこんを譲り受け栽培したのがはじまりとされる。現在は、京都府下や他府県での生産が増えているが、市内でも生産されている。聖護院かぶは、千枚漬の原料となり、御所の料理人であった大黒屋藤三郎が慶応元年（1865）に考案したと言われている。千枚漬は、京都の冬を代表する漬物である。

これら京野菜の生産が営まれている周辺の農家住宅は町続きの街道沿いなど洛中に近く、建築形式としては町家に近いもので、近世中期くらいからこのような形式の農家住宅が形成されてきたと考えられる。

農家が収穫した京野菜は、流通の進歩により全国各地に出荷されているが、京都市内では、かつて大八車に載せて、直接各家庭に売りに回っていた「振り売り」が、軽トラックに形を変えて続けられている。また、各季節の京野菜の収穫期には、農家の軒下による直



写真2-127 振り売り

売が行われており、市民のみならず、訪れる人々の食卓を彩り、味覚はもとより、本来の日本の季節感を楽しませている。

このように、京野菜の生産や販売などの営みは、伝統を守りながら今もなお受け継がれ、それらの営みは、昔から変わらない人々の京野菜に対する姿勢を感じさせる。そして、周辺の農家住宅等の歴史的建造物、背後の山々の風景が、農業が行われている田畑を包み込んでおり、京野菜の歴史を感じさせる。

さらに、京野菜を通じて京都の食文化を支える活動は、京都市内全体における人々との交流を通して、趣のある風情を醸し出している。

季節別「京の伝統野菜」一覧

春 の 野 菜	花菜 (伝統野菜に準じるもの)	1月上旬～ 4月上旬	冬 の 野 菜	すぐき菜	1 1月中旬
	佐波賀だいこん	2月～5月		えびいも	1 1月上旬～ 1 2月中旬
	京たけのこ	3月下旬～ 5月上旬		京せり	1 0月下旬～ 4月上旬
	畑菜	3月下旬～5 月上旬		舞鶴かぶ	1 1月上旬～ 1 2月
	時無だいこん	4月		堀川ごぼう	1 1月上旬～ 1 2月中旬
	京うど	5月		辛味だいこん	1 1月上旬～ 1 2月中旬
	桂うり	5月～6月		青味だいこん	1 1月～ 1月下旬
夏 の 野 菜	伏見とうがらし	4月中旬～ 1 0月下旬		桃山だいこん	1 1月中旬～ 1月下旬
	万願寺とうがらし (伝統野菜に準じるもの)	5月中旬～ 1 0月上旬		松ヶ崎浮菜かぶ	1 1月下旬～ 2月下旬
	じゅんさい	5月～9月		くわい	1 2月
	もぎなす	5月～7月		茎だいこん	1 2月中旬
	賀茂なす	5月中旬～ 9月上旬		大内かぶ	1 2月中旬～ 3月上旬
	山科なす	6月中旬～ 9月下旬		鶯菜	1月～2月
	鷹ヶ峰とうがらし (伝統野菜に準じるもの)	6月～9月		佐波賀かぶ	2月～3月
秋 の 野 菜	田中とうがらし	6月上旬～ 1 0月下旬	そ の 他	みず菜	通年
	鹿ヶ谷かぼちゃ	7月上旬～ 8月中旬		壬生菜	通年
	柊野ささげ	7月上旬～9 月中旬		九条ねぎ	通年
	京みょうが	9月		聖護院きゅうり	保存
冬 の 野 菜	聖護院だいこん	1 0月下旬～ 2月下旬		郡大根	現存しないも の
	聖護院かぶ	1 1月～ 2月		東寺かぶ	現存しないも の
「京の伝統野菜」の定義					
1. 明治以前の導入の歴史を有する。					
2. 京都市域のみならず府内全域を対象とする。					
3. たけのこを含む。					
4. キノコ類, シダ類 (ぜんまい, わらび他) を除く。					
5. 栽培又は保存されているもの及び現存しない品目を含む。					

(イ) 生業の山

a 北山の林業

京都北山地域は、京都市街地の北西部に広がり、「北山杉」として全国に知られた磨丸太生産を特徴とする日本でも有数の林業地帯である。谷沿いの斜面はいずれも急峻^{きゅうしゅん}で、水田や畑地として利用できる谷底の平地は非常に狭隘^{きょうあい}であったことから、集約的な林業が営まれてきた。1年を通して気温が低く、ほどよく湿り気の多い空気が、北山杉を育てるのにこの上ない条件を作り出している。

なかでも中川・杉坂・真弓・大森といった集落周辺では、杉材の生産が盛んに行われた。

北山杉の林業地域は、京都の「近郊山村」というべき位置に立地し、古くから京都の経済と密接に結びつく形で生業が営まれてきた。北山杉の歴史は古く、約600年も前の応永年間(1394～1427)までさかのぼる。近世以降、これらの地域は茶室建築や数寄屋造り建築の需要の高まりと併せて、床柱や垂木などの建築用木材の供給地となった。天明7年(1787)に発行された「拾遺都名所図会」^{しゅういみやこめいしよずえ}には、北山杉の川流しの様子が描かれている。

北山杉の木材は、磨き丸太という、樹皮をはぎとった丸太を砂できれいに磨きあげた無垢の状態で用いられることに特徴がある。加工によって形状を修正することができないため、育林時に一本一本の杉木を用途に応じてまっすぐに、太すぎず、細すぎず、そして美しく節のないよう慎重に育てる必要がある。このような手間暇をかける生業が代々に渡って受け継がれ、そして今も行われているのである。



写真2-128 北山杉



写真2-129 北山杉の磨き

b 林業を支える建造物群

この辺りでは、北山杉の斜面地に囲まれた狭隘な地に集落が形成されている。このため、作業場を敷地内の前庭などに取りが必要があり、広い前庭と対照的に屋内の土間は非常に狭い。このような、独特の配置と内部構造を持つ歴史的建造物である茅葺民家などが伝統的集落の佇まいを今に伝えている。

また、川に沿って長く建ち並ぶ乾燥小屋の眺めは壮観である。多くは木造2階建てであるが、建物全体を包み込む大きな屋根の連なりは見ごたえがある。北山杉丸太の乾燥小屋は、全国的にも類例を見ず、その存在はきわめて珍しい。



写真2-130 乾燥小屋の眺め



写真2-131 茅葺民家

このように、現在も続けられている林業によって形成された、まっすぐ上に伸びる北山杉の美しい人工林風景が、磨き丸太の乾燥小屋などの生業に関わる施設や民家とともにこの地域の集落特有の町並みが形成しており、京都の伝統産業の技が今もなお、綿々と受け継がれていることを感じさせている。